

ドッペルゲンガー

## 同時生霊失踪事件（特編）

坂井瑞穂

### 「前号のあらすじ」

九州福岡に住む作家北島一枝は、その地の波津海岸に倒れていた若い娘を救い自宅に引取った。ミドリと呼ぶことにしたその娘は自分の記憶をなくしていたが十年程共に生活していたある日、忽然と姿を消してしまった。

日常会話の訛から遠州相良に目星をつけた一枝は、手掛りをと訪れた日に早速ミドリに酷似した娘を見つけたが、その彼女は母親の押す車椅子に乗せられた身だった。

おどろきの余り心乱れた一枝は飯津佐和神社の境内で体を崩してしまった所を町内に住む房江と自称探偵の河原崎健勝という夫婦の自宅に招かれ休養す

る。

房江と車椅子の娘ミトとは幼馴染で同級生。事故以来ずっと車椅子の生活をしているというので、恐らく別人だろうとなつて一枝は九州に戻るが、それには健勝も付き添い乍ら同行ということになった。一枝の自宅に着いて彼女の運転する車に乗った健勝は波津海岸、民俗資料館と回りミドリの足跡をたどつて見た。翌日も海岸めぐりをし、一枝の案内で浜辺の一軒のあばらやへ立寄つた時、暗雲と雷鳴の中で健勝は不意に異様な感覚に襲われた。

(一)

健勝が一枝に促されて小屋に戻ると、空には薄明が覗きはじめていた。

「ご免なさい、健さん。疲れているのね。」

健勝は吹き遊ぶ嵐の中で、自分の身に起こったことを思い出そうとした。そう、自分は緩い傾斜の砂地に尻餅を突いていた。何かに恐れ、それで腰を抜かして了ったのだ。

ゆったりした時間が嵐を鎮め、聴<sup>き</sup>ては鈍い月の光が周囲に立籠めたモヤを照らした。そしてその余りに無変化

な闇の空間に何かを見つけだそうと動作を繰返していると、波音に混じって文珠蘭の芳香が感じられた。そちらの方向に眼を凝らすと波の視界にうつすらと、光沢を失った白い花が一つ二つ映った。

だがしかし、一枝の話の話を聞いてみると波打際に健勝がいるのを見つけたとき、健勝は浜木綿<sup>はまゆう</sup>の群生だといって蹣跚<sup>よろめ</sup>しながら海の方へ行こうとしていたというのである。「浜木綿なんてもう花を終えているのよ。それにね、健さんあなた、雷が鳴ると何かに憑かれたように外へ飛び出していつて。」

「そげんわやしおつたんかの、み・ご・う・悪い話じゃのう。ほんでなんじゃやな。北嶋さんは何んともないんに僕だけびつしやこになつとる。うたてえと思うたんじゃ。碧さん搜したるちゅうて、おけんたいこと言うて、まんず、は・ぐ・い・けん。じゃが確かにこは夏井浜なんじゃやな。」

濡れた服を着たままの健勝に、一枝は脱ぐように言つたがそれを健勝が厭がつたため改めて口を開いた。

「実はねえ、この小屋は少し前まで産小屋として使われていたのよ。海女さんたちつて、身籠つた子が生まれる直前まで仕事をしていたから、仲間同士で産婆さん、助産婦さんといったほうが判り易いかしら、直ぐに呼べるようにしていたの。」

私はむこうで両親と死別して、帰つてくると弟に先立

たれてしまったでしょう。急ぎ足で移り変わる世の中で、自分の存在が何なのかも判らずにいて、結婚して子どもを生んでなんて考えもしなかったの。身に憶えもないのに子どもができたときとは本当に信じられなくて。

今ならシングルマザーとかいつて威勢よくしていられるのかも知れないけれど、やつぱり社会の風当りを気にしていたのね、不安ばかりにさいなまれていると、知りあいの海女さんがここを教えて呉れて、そのひと敬虔なクリスチャンで私のことをマリアさんに喩えて勇気づけてくれたわ。

私が産気づいたのはもの凄い雨の日で、臨月まで二月を残していたから慌ててここに来たの。扉の前に金盥を置いておくすぐに溢れてしまう程の雨で、私はひとりでこの子を生んであげようとお湯を温めていたのだけれど不成の兆しして予感できるものなのね。それまで毎日お母ちゃんと呼ぶようにおなかの中で響いていた鼓動が全く聞こえてこなくなつてた。私が初めてこの手で抱いた子どもはもう息をしていなかったわ。

嵐が止んでいたかどうか思い出せないけれど、海の方で何かが騒めくのが耳に入つて、私は小さな亡骸をそつと抱いて浜辺へ降りてみると、聞こえていたのは姑獲鳥うづまどり、産褥期の病いで亡くなった女の人のたちのことね、その啼声だったの。けれど私、ほんの瞬時でさえこの世に生き

ることができなかった子どもがあわれで、弔つてあげることもできないで、この子がもういちど幸せに生まれてくる日まで私に預らせてくださいつて念じたの。

それから私は深い眠りに落ちて気がつくと三日を経ていたけれど、何ごともなかったように子どもは胎内に戻つていたのよ、ほら。」

一枝は健勝の手を握ると掌を当てさせた。

「動いているでしょう。もう三十年以上このままなの。」

健勝はひとつ溜息をつくと納得顔をした。

——胎内に飢する鼓動、僕が嵐のなかで耳にしたんは。

じゃがしかしそれは——

「私が碧と出会つたとき、てつきりこの子が姿を変えて現れたと早合点したわ。でも碧と暮らしている間もずつと動いてた。不思議でしょう。こんな話、今迄誰にも話したことなかったの。そう信じて貰えるものでないし、けど肩の荷が少し降りた感じ。」

「けどな、北嶋さん、僕にはそげんもや・すい・ことには思われんのじゃけん。そうじゃ。神功皇后さんみたいに子どもが味噌桶になつとるけ、あの伝説にあるジブシーの尼さんと同じで、人の何百倍齢を重ねんといかんのかも知れんじゃろが。」

「覚悟はしてるわ、私に与えられた宿命っていうのかしら、ひとつひとつ明らかになっているもの。」

「実はな、このことはフサにも言うたらんのじゃが。」  
項垂れた上半身を振るようになり、健勝は探偵として、初仕事の顛末を話しはじめた。

## (11)

上津の留守中に訪れたフランス人ハイデマリ・イレドの依頼は、神隠しに遭った二人の姉を捜したいというものだった。健勝は大学生当時、榛名山の噴火で滅亡したとされる古代都市の推定地点に稀に発生する空間の歪みを体験したことがあったが、遠来の依頼人を前に、こりやあずりそうじゃ、と手を上げる他なかった。

難事件と予想されたが、上津に後押しされ依頼人と共に渡仏した。健勝が、まのあたりにした異界は、彼の想像を絶する様態をなしていた。そこには彼女の姉たちを含む神隠しに遭った人たちが、圧縮された微小空間に閉じ込められていたのだった。

「きょう・えもんじゃったけん。信じられんじゃろが。結果から言うて僕は彼女の姉さんたちを救い出すことはできなかった。そいだが末妹のニーナちゃんもえらい目に遭わすところじゃった。完全にそくつたと思うた。」

じゃがイレドさん、僕よりや靈感が強かったんじやな。自分じゃ気付かんかったが、空間の歪みを均してもうた

と言うたんじや。ほいで彼女らには、もう危険に曝されることは無うなつたと。

業を煮やしたまま帰つて来たんじやが、たまげたんは謝礼いうて国際送金があつたことじや。うたてえ位の金額じゃつたのう。」

「それでフサちゃんと一緒になつたのね。」

健勝は照れ笑いを浮かべたが、外はだいたい明るくなつた様子であつた。

「前から気になつとつたんじやが、例の、北嶋さんが体験したちゅう杉津浜の椿の、あの件じやが、向うの世に生きちよるもんがほうろくしよつたんが、数百年に一度の可能性で発生する空間の接点で出会えたちゅんなら、不完全な必然か、完全なる偶然か、幾つかの要素が重なつたところに決定打があつたちやうことじや。恐らく北嶋さんも無意識じゃつたと思うが、時間軸を操つとつた筈じゃけん。そう考えると異界じや靈界じやいうてもやげろしくはなさそうじやな。そがいうても腰呉れてへたつとつたら話にやならんがの。」

二日三日と日を送り、仰ぎ見る海原同様、何の変哲もない自らの行動に、健勝は聊か土気を落としていた。最初は使命感が先にたち、邁進の気構えでいたが、今は文芸作品を通して得た女流作家への好奇心が昂じて、只単に付添っているだけではないのかと、自省するにつけ己

の浅ましさが込み上げた。

当初の目的である碧の搜索が思うように進まぬ以上、身の振りを改めねばならぬ。健勝は鐘崎の沖合の大島へ渡った。名案が浮かぶかもしれないし独りで考えたいことがあるからと一枝に断った。

いつも手に合はんちゆうに、北嶋さんはぶるぶる言わんけえ、つい甘えてしまうようなる。健勝は恨めしかった。

宗像大社の中津宮の脇から葛籠にのびる道を、島の突端目指し足を進めた。北西の風が強く集落を離れると人影すら見えぬ。纏て草茫茫の丘陵に珍しい要塞の凹凸が眼につき、急斜面を下ると絶好の釣場に出た。

雨になつたらあの濠に潜つたらええんじゃけん、呑気に糸先を眺めていると、程なく黒鯛や伊佐幾が懸かってくるようになった。清爽な潮香と満足の釣果に棹を振る動作も軽くなると、心の中もなだめられ、その翌日の翌々日も同じ磯に蟄伏した。

岩場に寝そべり墮眠を貪っていると突然携帯電話が鳴った。房江からだった。

「健チャン、どう。北嶋さん元気になった。ちゃんとついてあげてんだら。」

高波が砕け豪快な音をたてた。

「今どこ、まさか呑気に海釣なんかしてるんじゃないら

いね。」

言い訳弁解冗談八割、押問答に苦勞していると電話が切れた。房江の伝言は、「上津が一報欲しい」というものだった。

「全くフサの奴、けど何んで判つたんじやろ。」

健勝が愚痴をこぼしているとき岩の影から一枝が現れた。「北嶋さん、今電話でフサともまじとつたけん。北嶋さんについてあげんといかんて、ひようげるじやろ。ありやはぶてるんが悪い癖じや。そーいや北嶋さんが来た前の日も喧嘩しちよつたのう。」

フサは古物回収をしとるんじやが、そが衣類やら二束三文の小物ばつて、リサイクル言うたら聞こえはいいが、せわしいだけじやて、なんぼしわいちゆうても稼ぎにならんじやろちゆうたんじや。もつとりチウム乾電池とか少量金属抽出の設備とか扱うなりして採算考えてせにやならんじやろて。」

「フサちゃんきつと安心していられるのね。たよりになる旦那さまがいるお蔭で、意固地にならなくてもいいつて思えるんじやないかしら。」

「そうじやろか。」

魚籃を引き上げると中の魚が勢いよく跳ねている。よくみると大きな眼仁奈がいた。一枝は感心して昨日の釣果をどうしたのか尋ねると、漁具を貸してくれた旅館に

あげてしまったという。

「この先の田辺屋さんちゅう、中津宮の仮社のあるところじゃえ、こげにこつもん僕は捌ききれんて、この漁籃を返すときにあげてしまお思うとるけん。」

「そう、じゃあ今日はそこに泊つていきましょ。私もあのお宅知り合いだもの。あそこのおばあさん、海に潜つていたころ、いろんな話を聞かせてくれたのよ。」

田辺屋は港からみて島の裏側にあたる網瀬集落にあつた。魚など見馴れていると思われたが、附近の家から健勝の釣上げた眼仁奈を見に来る者もいた。

「健さん、ずつと釣りをしてたのなら山の方へは行つてないでしょう。」

一枝が誘つた。健勝は一旦上津に電話を入れなくてはならないので、後で追い駆けるからと先に行つて貰うことにした。

「あつ先生、僕ですけえ。」

「田村君、よかつたあ。何度かけても通じなくてね。また妙なところに入りこんじゃつたのかつて、心配しましたよ。今福岡にいるの、そのお嬢さんの手掛りは、えつ、駄目ですか。僕のほうも君に頼まれた搜索人願の件は当たりました。そつちはさつぱりだったけど、例の事故に遭われた紅林さん、君の奥さんにも確かめたけれど腑に落ちないことが二、三あつたので、こつちへ戻つてこら

れますか。いえ、北嶋さんでしたつけ、放つておくことができないのでしたら仕方ありませんけど。」

いつも乍らに、上津のものの静かな喋りが伝わってきた。

### (三)

村外れから島の最高地点に遊歩道が通じていると一枝にきいていたが、行つてみると海に向かって建てられた石祠の前で一枝が待つていた。

「ほら、見てごらんさい。」

一枝が指差した水平線の遥か彼方に島の輪郭が認められた。

「あれ、沖の島じゃろ。」

宗像三社のひとつ沖津宮はあの島にある。全域が神域とされ、一般の人の上陸は許されず、神官ですら海中で禊<sup>ミヤギ</sup>を済ませてから中津宮へ向う。つまりこの石祠を仮社として普段参詣ができるというものなのだ。そして大島の中津宮、内地の辺津宮と合わせて碎かれた素戔鳴尊<sup>スサノミコト</sup>の剣から生まれた三女神を祀っている。

「宗像大社つて私、特別な思い入れがあるの。初めて訪ねた土地でもそこに宗像の末社を祀つていて、それで土地の人と直ぐに親しくなれてしまつたり。」

「宗像の末社は確か人魚伝説の発祥地に重なつとつたん

じゃな。」

年齢を感じさせぬ歩調で急坂を登る一枝に引つ張られるように、展望のよい頂きに出た。社殿に「瑞津姫神」と記されこも中津宮の境内であることを認識した。

「あなたたちの町の波津佐和乃神社に着いたときも、何んだか初めて訪れた土地ではないような感じになって、素戔鳴尊が祀られているでしょう。素戔鳴の系の神社は確かに数は多いけれど宗像三社の姫神たちとは親と子と言つていい位近い血筋でしょう。私の身に起こることだつて全て何かの因縁があつてのこと、決して偶発的に起こるのではないのだから、そう考えると全身から力が抜けていくようだった。それでフサちゃんに助けられたのね。」

「神頼みのちゅうか北嶋さんが依存心をもつて行動しとつたなんて僕には意外じゃけん。僕の北嶋さんに対する先入観は、『林檎園の奈落』に無防備で飛び込んでいく姿じゃつたからのう。」

けど姫神の三姉妹で、ギリシャ神話に出てくる運命の三姉妹に似てると思いませんか。ラケシス、クロート、アトロポスの三人がいて、最後に布を裁断する役がいつときようてえんじやと。沖の島の田心姫神おいはすまみたいに。

そいとなんじやが上津先生のほうで調べが進んだようなんじや。なんとこの紅林ミトさんが事故に遭うた前後に

全く別の所に現れたとかいうて。明日戻ろうと思うんじやが、フサも上津先生も北嶋さんがショックで手に合わんようになつとりやせんかて言うとなつた。かたからざまくなこと言うてわやしとつたけえ、申し訳なく思うとるんじやが。」

「林檎園の奈落」は女学校時代のものよ。あの頃は父も母も元気で、どうしてあんな大胆な発想ができたのか今思うと不思議だわ。でも自分が書いて残したものには責任もたないといけないわね。

今晩は健さんの釣つた魚のお料理で乾杯ね。探偵の依頼がふえたらこれからはなかなか会えないでしょうし。」海面がまだ茜色を煌かせていたが歩を進める坂道は足許をすっかり暗くしていた。

大島渡船の対岸神湊に車を駐めていた北嶋一枝に、健勝は赤間駅まで送つていくと言われた。赤間は宗像市に位置し快速が停車するから時間が無駄にならぬであろうと、案の定、新幹線に乗継ぐ小倉へは四十分で着いた。

ロケットを模したような「のぞみ」に乗り席に着くと、健勝はこちらに来て碧の追跡を思うように行えなかつたことを後悔したが、同時に幾つかの疑問が沸き始めた。

#### (四)

先ず記憶を無くし、十二年の間その記憶を戻せなかつた碧が、何を手掛りにどこへ移動したのか。このことは事前調査もせず現地に赴いた自分に非があるが、一枝の体調を第一に考えたのだから止むを得まい。だが一枝の話を聞くにつけ碧は本当に記憶を失つたのだらうかということだ。

人間は本来所持すべき記憶を失うと、それを恢復させようと躍起になるものではないのか。努力の甲斐なく思ひ出せないとなれば不安に苛まれ軋ては恐怖を抱くにも至らう。決して安穩としてはおれぬ筈だ。

だとすれば碧は記憶を失つたのではなく初めから記憶がなかつたのではないか。初めから無いものは失うことはできぬものだ。

さらには碧の口にした遠州弁、靈感の優れた一枝であれば容姿その他共通点をもつ紅林ミトに一足飛びで迫り着くのも納得できる。しかしミトは交通事故の後遺症で身体を自由を奪われ、この間独りで行動した形跡がない。最も無関係な土地での目撃談も出てきたようだが、それは追って確認せねばならぬ。

「あゝあ、頭痛うなつてきたけん。」

岡山到着の車内放送があつた。ここで「のぞみ」から静岡停車の「ひかり」に交替えなくてはならない。その列車が始発であつたこともあり、余裕をもつて座席を確保すると直きに眠気が追つてきた。

静岡で在来線のローカル特急に乗替えると身延に着いたのは午後五時過ぎであつた。

身延町は日蓮宗総本山である身延山久遠寺の門前町として常時その賑わいを見せているが、富士川急流に沿つて開けた町は至つて素朴な佇みである。身延線は急峻な山峽地形を縫うように通つており、雨の多い夏から秋にはしばし不通となる。上津裕輔の自宅兼事務所は、線路を挟んで、身延山とは反対側のそそり立つた山の入口にあつた。

富士川の流れと、駅に発着する電車を見下すには恰好の展望台となる丸山公園（今では訪れる人もいないが、以前はそう呼ばれていた）の一角に建つていた小字の集会所を、上津が買ったのである。身延線の前身、富士身延鉄道の開通に際して建てられた記念石塔と、功績を讃える六人の偉人碑がある。上津はそのなかのひとりと姻戚関係にあるのだという。この山を地元で金六山と呼んでいるのもその偉人のひとり小野金六によるものだ。健勝は駅裏の空地に上津の車がないので帰りを待つ積りでいたが、展望台のところに見えた人影を追つてゆく

と、そこにいたのは妻の房江だった。人待ち顔で石塔に凭れるように景色を眺めていた。

「おお、フサ、来とつたんか。ようここが判つたのう。」

「下の踏切の脇の牛乳屋さんが教えて呉れたん。上津先生、七時頃には戻るつて。何にか重要な糸口を掴んだつて。それで私にも来て欲しいつて。健ちゃん、北嶋さんは。」

「大丈夫じゃ。再来週あたりから講演の依頼も引受けるちゅうとつたけん。」

陽光が山かげに隠れ、秋らしい風につて赤蜻蛉が宙返つた。一匹が舞うとその都度仲間を伴い戻つてくる。

そうして飛来した一匹が房江の顔の上にとまつた。健勝が人差し指で房江の切揃えた前髪に触れると、蜻蛉は指先に攀登ろうとしていたが、瞬く間に暗くなつた杉木立の高みに飛び去つた。

「なあ、家の中で待つてようか。」

どつぷりと日の暮れた頃、坂の下から重苦しい足どりで、息を切らせた上津が戻つてきた。

「毎度思うのですけどこの急坂何んとかありませんかねえ。ここは景色はよいのですがね。房江さん、よくいらつしやいました。」

上津は自慢の鳥打帽チンを脱ぐと、吹き出さんばかりの汗を拭きながら言つた。

「お土産です。これで飯にしましょう。」

と無造作に紙袋を置いた。健勝が中を覗くと葡萄が沢山詰めてある。

「これで飯つて、もうわやじゃけん。先生、僕がしごうするけん。」

健勝がそくさと勝手口にたつと今度は房江が見馴れぬ袋を見つけた。

「健ちゃん、これなあに。」

「それは烏賊いかの燻製じゃ。ひい・かちゅうてな。玄海灘じゃあ毎年冬になると荒波に混じつて浜辺に飛んでくるそうじゃ。大きいのは一米にもなるんじやと。なあフサ、この家には稗飯ひいしかないが、我慢しいな。」

健勝は研いだ雑穀米の鍋を携帯用の焔炉かまどに懸けた。竈かまどなど用いては、火を起こすだけで難渋する。

「先生、温泉に入つて帰りに大汗掻いたんじや、様にならんぢやね。」

上津は上機嫌に葡萄酒を独りで注いで飲んでいる。

「大きな収穫だと思ふよ。まあ君たちも飲みなさい。さて、最初にこの話の整理をしておきましょう。房江さん、あなたの同級生の紅林ミトさんの幼少時を覚えていますか。」

「小学校入学する年の一月に保育園にきました。」

「彼女の姓はその頃も紅林でしたか。」

「いえ、くぬぎでした。功刀ミトちゃん。」

「そうですね。ミトさんのお母さんの旧名は功刀キヌ、石和の出身です。功刀姓は山梨では珍しくありません。静岡の紅林と同様にね。」

夫の紅林八郎氏が商船の乗組員だった関係で母子は父親の退職する昭和四十九年まで石和の母の実家に暮らしていました。紅林さん夫婦は正式に結婚していたし、娘のミトさんも戸籍上の姓は紅林でしたが当時母親の故郷で生活していましたから便宜を計らっていたのでしょう。船員はそのころ五十五歳で年金を受けとれましたから、父親が船を降りて、晴れて一緒になれた訳なのです。キヌさんは八郎氏とおない齢ですから随分と高齢出産だった訳ですね。」

鞆の中から二本目の葡萄酒壺を出して詮を開けると、上津は若い二人に振舞い一つも意気軒昂の様相で続けた。「きょう確認をとりましたけど、ミトさんは事故に遭われた昭和六十一年の春に石和に行っていましたね。卒業式を終えた高校三年生の娘が母親の故郷を訪れたことは別段問題ありませんが、重要なのはその月日です。ミトさんの事故は三月二十八日でしたけれど、石和で彼女に会った人は四月上旬だということです。」

その話をされた楠さんという方は、旧姓功刀キヌさんとは親しくて、当然娘さんの幼い頃の様子もよく知って

いますから、自分が働いている旅館に、見習いとして働きたいとやってきたミトさんのことは、鮮明に覚えていたのです。特徴的なのはミトさん、と思ひ娘さんと言うべきでしょうか。自分の名も思い出せないというようなことを言っていたようで、結局は試しに勤めさせてみたものの、四、五日目にはいなくなってしまうとい

ます。その確かな日時を、楠さんの息子さんが思い出して呉れました。彼はその年に大学を出て地元会社に就職したのですが三月中は卒業旅行ということで外国にいました。母親が自分の職場に知人の子どもが勤められるようになって喜んでいたので見ているから四月になつてからだろうと――。

僕の調べでそれは四月五日ですね。」

「ちよいと待つて先生。ミトさんの事故は身体が利かなくなる事故故じやつたろが、四月つてどういことじゃ。」

「この記事を見て。これらは「峽南日報」と「郡内新聞」、県内の有力誌の切抜きです。」

記事を見た健勝の目が大きく開かれた。

## (五)

「房江さん、辛いとは思いますが、当時の波津百花町の様子を話して呉れませんか。」

「ミトちゃんと私は中学は一緒だったけど、高校は私が公立のI高、彼女が私立のY高で別だったし、町で顔を合わすこともなくなっちゃったんです。私は名古屋に就職先が決まっていた、三月二十八日は荷づくりや引越しの準備をしてました。前の年、高三の夏だけど、父が亡くなつて百花の家も未成年の私ひとりになつちやつたら、後見人になつてくれた坂井の叔母さん、今私たちが住んでいる家にいた人だけど、事後処理を任せていたんです。」

その日のお昼頃救急車の音と一緒に大勢の人たちが騒ぐような声が聞こえたから行ってみるとミトちゃんがトラックに轢かれてもう助からないかもしれないって皆んな慌てていました。

ミトちゃんはお父さんをはやくに亡くして、母子二人きりだったわけだから。」

「紅林八郎氏は昭和五十三年に亡くなっています。」

上津が念を押すように言った。

「私が名古屋に発つ日、菊川まで送つて呉れた坂井の叔

母さんが怒りを隠せない様子で言つたんです。『恢復の見込みは少ないとはいえ、頑張つて生きようとしている人をはやばやと死んだと発表した新聞の誤報道が許せない』って、そう言いました。」

房江は肩を落とし言葉を繰つた。辛い過去に呼び戻された焦燥に血色は引いていた。脇では健勝が苦虫を噛んだ顔を見せた。

「ところが誤報道ではなかったのですよ。ミトさんは搬送された榛南救急病院でその日の深夜、治療の甲斐なく亡くなったのです。翌日キヌさんには決して受け入れられない一人娘の死亡診断書が手渡されたのですから。」

ミトさんが蘇生するという奇跡に至るまでの経緯は、僕らの計り知れぬものであるかも知れません。けれどもこの一連の出来事を解析することは、気の毒な紅林さん母子と君たちに救いを求めてきた北嶋さんのためにも、君たちに委ねられているのだから。」

上津は最後の一口を飲み干すと、膳を部屋の隅に押しやり手際よく三人分の布団を敷いた。健勝たちは煮えくりかえつた気持ちを鎮められず、なかなか寝つけなかった。

明くる朝、早起きをした健勝がとれたて野菜の自動車販売を目当てに、駅前通りへ下つていこうとすると房江が石塔の台座に腰かけて、ぼんやりと遠くの方を眺めて

いた。

夜明け前に目覚めてから、ほの暗い町の夜景を見ていたのだという。昨晚上津が解析した事故の真相に当惑したのかも知れなかった。健勝は買い物に誘おうかと考えたが結局はひとりで出かけた。

「お早う房江さん。」

朝の散歩にでも行くような出立ちで上津が呼んだ。

「昨日は急いでたものだから言い忘れましたけど、石和でいいものを見つけたんですよ。」

上津は一冊の古本を見せた。

「例の証言をしてくれた楠さんですが、石和の駅のまんに骨董屋を出してましてね。まあ骨董屋というより我楽多市というほうが似合いそうです。」

君たちが親しくなった福岡の女性って、この本の主人公として描かれている人じゃないかと思ひましてね。まあ、この物語が事実に基づいて書かれたとしたら、そのひとは探偵の鏡といえますね。日本のシェーン＝マープルという表現は決して誇張ではありません。

田村君、いや健勝君とは大学の専攻研究をお手伝いしたのが縁で、その後はすっかり僕の仕事をアシストして貰っていますが、どうもこの頃彼に頼りきってしまっていたようです。君たちは新しい生活を始めたばかりだし、僕も老け込まずにまだまだやらないといけないな。」

いつ買い物から帰っていたのか、健勝が朝食の仕度が整ったと大声で叫んだ。

「なあ先生、セイゴでどこにあるんじやろか。身延町内と言うとつたがの。こげな高原野菜ばあとなるて、そげに標高の高い集落かのう。」

「それは栗子だね。山の頂上にある集落で一時は廃村の危機もあつたけど近頃は婿とり集落で有名になつてゐるし、数日前もテレビで朝の県内ニュースに出てたよ。」

上津は思い出した素振でスイッチを入れた。

——昨日収穫期を迎えた葡萄農家で、出荷に備えた葡萄が盗まれる被害が発生しました。九月に入つて鳴りを潜めていたかに思われた葡萄泥棒は、勝沼町と春日居町の……

「先生、どうしたんじや。星一徹じゃないんじやけん。」

何に驚いたのか上津は、汁椀を持った手を離しそうになつて危うく食卓を横転させるところだったのだ。

「いや、急に思い出して。冷蔵庫の葡萄を出そうと思つてね。」

葡萄は「恵林」という新品種で、大粒で種のない美味なものだった。喜んで平らげてしまうと帰宅の途について。健勝にとつては三週間振りの家である。

「なんと、何ヶ月も離れとつた気がするのう。」

尤も房江の家で同居をはじめて半年に満たぬのだが――

二人を乗せたローカル特急は甲駿国境の山間地を蛇行を繰返しながら下つていた。車窓からは名物の筍が採れそうな立派な竹林や、幟の目立つ日蓮宗派の末寺、進行方向右側には一貫して川幅を広げた富士川急流が覗いていた。

房江はさして風景に興味を示さず時折<sup>あぐび</sup>欠伸を嚙殺していた。

「さつき先生と何を話しとつたんじゃ。」

「先生ね、今まで何度も事務所を畳むことも考えたんだつて。でも健ちゃんが来てからは張合いがでてきたつて言つてた。後継者として期待されているんだね。」

「まあ今の僕の直観力も判断力も、どれをとつても先生の足元にも及ばんが、いずれは、と思うとる。」

「ねえ、まだ福岡のこと聞いてなかったね。波津海岸行つたんだら。」

「そりやそつくりな景色しちよつたけん。フサが眼隠しされて連れていかれたら自分の故郷と間違えてしまう位にな。」

「そうだ、この本、上津先生がくれたんだけど、主人公が北嶋さんみたいなん。」

健勝に渡された本は、表紙が破れ全体が紙の色を失つて、著者も題目も判らぬものであつた。大雑把に頁を捲ると頻繁に「沖の島」が出てくるのに眼を留めた。「瀛津

島」とわざわざ旧字に置換えているところもある。粗筋は以下のようなになる。

## (六)

占領下の朝鮮に生まれた主人公のかずえは、響灘に漂着した一人の朝鮮の若者を救う。だが彼の仲間の数人は衰弱して沖の島に残つていくという。彼らは内地に連行された身内を追つて冒険を試みた者たちであつたが、当時の混乱期、社会には朝鮮を敵視、もしくは面倒を訝つて黙殺する風潮が蔓延していた。沿岸の漁師連中も聖地に踏入つてまで彼らを救おうとはしなかった。かずえは独り伝馬船を漕ぎ女人禁制の掟を残す沖の島に向つた。

漂泊した仲間を全員助けることには成功したが、彼女が生来の母語としたハングルを駆使し、朝鮮人の求めに答えようとする程、正視に堪えない忌むしい事実ばかりが浮彫りになつた。聴て傷心した彼らは一人二人と恩を忘れたようにかずえを裏切つてゆく。そうでなくとも意見は食違ひ衝突した。「君はどうして我われにそんなに尽くしてくれるのか」と問われ「私は朝鮮を外国とは思わないし朝鮮人を外国人とも思わない。日本人でありながら日本に帰国して以来戸惑つていたところなのだ。」と答える。

その後かずえは作家として活躍、又朝鮮帰りの小母さんとして親しまれ、歴史の語り部となつてゆくのだが、超自然を操ることができる能力と、研ぎ澄まされた靈感は沖の島に上陸したさいに身についたものと考えられる。

それは、短編だが興味深い内容だつた。確かに上津のいうように行方不明の家族を次々と捜してゆく姿勢はまさにシェーン・マールだ。しかしながら健勝は、物語りとして描かれた以上の深層をもつた、一枝の人間性を垣間見たことがあつた。沖の島を眺め乍ら宗像大社に特別な思い入れがあると告げた一枝の言葉は当然そのことを示している。

神域に踏入ることで得た能力、それゆえに或る種の孤独を背負わされてきたのだ。死産した吾子を再び胎内に戻すことで蘇生させた体験談を聞いたとき、その余りに凄まじい情念に驚かされたものだ。

健勝は本を読み終えると房江の眠り顔を見つめた。事件の真相に触れた落胆もあろう。それにもとより旅を得手とせぬようなのだ。彼自身新婚旅行に連れてつて遣りたいと思うのだが、その話になると房江は遠慮気味だ。

電車が大きく左に揺れ、着陸体勢についた航空機のように高度を下げるとその弾みで房江が膝にのせていた肩掛けを通路側に落とした。健勝は袋の中から落ちた楓葉

を型どつた飾りを拾つた。

「こげなもん、まだ持つちよつたんじやのう。」

房江と初めて知り合つた広島で渡したものだ。そのときの様子は刻明に思い出せる。広島駅の新幹線改札口で仲間三人に遅れをとつた房江に自分の連絡先を付して手渡したのだつた。

大学二年次を終えた春、ここまで来ながら実家に帰省するのを躊躇つて、平和公園で暇を潰していた健勝は、同じく旅行先で宿所を確保出来ずに困っていた四人組と知り合つた。彼女たちは宮島行きを断念しようかと弱気になつていた。健勝が自分はこれから車を借りて実家へ帰るからその車を使つて宮島を案内しようと発案した。

健勝の実家が津和野の柿木村だと判ると、今度は津和野に行きたいという話になつてきた。言い出したのは四人のリーダー格の若森祐子だ。このとき健勝は若い女性の心理を掴みきれずにいた。津和野に行つても宿の確保が先決じゃろが、何を能天気な――。

そこで健勝は策を捻つた。田村家は地元では旧来の名家とされ、父に次いで兄も村会議員を務めている。四人の来客に宿所を提供するに十分な空間を有している。だが健勝の目論見は他のところにあつた。彼は幼少時から家では祖父、両親、更には使用人からも小言を受ける立場にいた。その旧態依然の村社会の縮図というべき自分

の家に於いて、彼女たちは自分の親衛隊となりうるのだ。都合よく父と兄は不在だった。母とは少しは話し易いところはあったが矢張り小言は少なくはない。そして女の子を四人も急に連れてきて、と咎められたのを見られていたのか、

「田村君のうちって結構厳しいんだね。」

と半ば同情の眼で言われた。面白くないので四人を誘つてもう一度津和野の夜景を見に行くことにした。

「古臭いじゃろ。僕の家はいつもこんなんじゃけ、もう息が詰りそうじゃ。」

それまで殆んど口を利かなかつた房江が笑みを見せたのがルームミラーに映つた。

「やつと笑つて呉れましたね。」

このときは房江の名前も知らなかつた。

## (七)

健勝が拾い上げた楓葉飾りを胸のポケットに仕舞い、帰宅した房江に渡したのは三、四日後のことだった。その間房江も気付いていない様子であつた。

「フサ、落とし物じゃ。」

「厭だ、何んで健ちゃんを持つてるん。」

「身延線の電車でねぼけて落としたじゃろが。」

健勝はひと呼吸置いて房江に意見を求めようとしたが、どうやら房江は察していたらしく、

「健ちゃん疲れてるんだら。私も上津先生に会つて、探偵の仕事がどれだけ大変か判つたよ。けど先生は健ちゃんに期待してあれだけ応援してくれてるじゃん。北嶋さんだつて碧さんの行方をはやく知りたいんだし。私だつて最初は少し落ちこんだけど現実から眼を背けちゃいけないいつて思う。それに健ちゃんのがびちゃつたら皆んな困つちゃうら。」

「そうじゃな。実いうと今朝方、波津の百花町へ行つてきたんじゃ。フサの家があつた辺り、どうしても確認したいことがあつたげな。結論いうと、誰の記憶も曖昧じゃな。フサの小さい頃のことはよく覚えとるんじゃが。」

先ずフサと同じ年の、秋野さんと名波さんじゃが。」

「私、男の子とはそんなに話してないよ。」

「けど二人とも『フサが結婚した』いうたら驚いとつたけ、尤も彼らは都内の大学じゃろ、四月以降のことは知らんちゆうても仕方ない。事故の直後は亡くなつたと知らされた同級生が実は生きていたと判つたんじゃけん、そのときは安心したちゆうことじゃ。そいと向いの先生<sup>センショウ</sup>さん。」

「志季ちゃんのところも行ったの。」

「小つちやい子連れて実家に遊びに来とつたけん。彼女

は一年後輩じゃろ。フサの伯母さんと同じで、新聞のゆきすぎた報道に対して怒ったひとりじゃ。実際には顔を合わせてないとはいいが、紅林さんのお母さんが動けない娘を傳かたづいて世話をしている様子は判わつたんじゃと。まあ、あの事故でそげに早く退院させられたとなると、余計に謎じゃが、少なくとも死んでいたなどありえんな。」

房江は黙って聞いていた。

「そこでなんじやが、フサはどう思うかの。一度死んだ人間が蘇生するちゅんは。」

「私はあると思うよ。テレビでやってるようなことが身近かで起こるなんて考えられなかったけど、でも何日もたつてからつていうのは信じられないかな。」

「そこなんじや。ミトさんの場合は死後直後の蘇生とはいえん。生き返つたとされるまでに三週間以上の開きがあるけんの。レディⅡギルラの極端な事例を除けば、古来不有の事件じゃ。この際キヌさんが病院から死亡診断書と受け取つたかとか、何故それを役場に届けなかったかは問題にはならんけえの。ついでにいうと、事故の加害者とされるトラックの運転手の側からは、保険会社を通じて慰謝料及びその後現在に至るまでの治療費用が支払われているんじやけん。」

「健ちゃん、それっておかしいよ。」

「ああ、完全に矛盾しとる。どこで断層ができたんか。」  
「ねえ健ちゃん、私もひとつ気になったことがあるん。健ちゃんが仕事にゆき詰まつたみたいだったから、独りで考えてみたんだけど、その前にちよつといい。」

そう言うとなら房江は文庫本を二冊出した。

「私ね、健ちゃんに乾電池を扱あつかえていわれて、乾電池は無理でも、古本なら扱あつかてもいいかなって思つたの。上津先生が山梨の石和で見つけた本があつたでしょ。あの作者判つたよ。北嶋さんが出てくるの。あれ栗栖川くりすがわの「海の坂道」つていう本だつた。ほら同じ本だら。それからこつちが同じ作者の「愛しき同時生霊」。

「同時生霊いうたら、幽体離脱か何かを起こして、同じ人間が二人になつてしまふ現象じゃろ。随分とオカルトめいた話なんじやろな。」

「もし私が想像したとおりだとすると、怖い。」

房江は口に出そうとしたものを押し戻すように話しをやめてしまった。

「ご免、健ちゃん、もう少し考えさせて。」

「僕は構わんが、気が向いたら話して呉くれんけの。ほいたら土産話の続きじゃ。その先生せんせいさんのおばちゃんがな、あのひと喋りじやつたろ、フサに会いたがつとつたけえな。フサが結婚する年齢になつたつて感動しとつたんじゃ。吾が娘が嫁いでるちゅうに、面白いじゃろ。」

僕も齢をきかれたたけえ二十三じやて答えたけんの、ほいたらそげに大きくなつてじやと。」

健勝は房江が話題を変えたがつている様子なので話をやめた。自分にもまだ解せない点はある。第一に石和に現れた紅林ミトと思しき少女、彼女が碧ではないのか。そして二つめは、その碧の行方を追つていた一枝が福岡へ同行した頃から、妙な落ち着きを取り戻していたことだ。

房江は自分なりの意見をもち乍らそれを言い出せずにいるのをもどかしく思つていた。健勝は海へ行つた様子だ。彼のサーフボードがない。健勝がいつも思考が硬直したときは波に乗つて過ごすのが一番いいと言つていた。相変らず波はしずかに打寄せているが、陽が陰ると水面は鉛色を濁す。吹く汐風も日増しに冷たさを押し流してくるのであらう。

### ○方言解説

わや（無茶）・みごう悪い（格好悪い）

はぐい（はがゆい）・びつしやこ（ずぶぬれ）

うたてえ（おかしい）・おけんたい（堂々とした）

もやすい（単純な）・あずる（困る）

きようてい（恐ろしい）・そくる（失敗する）

ほうろく（にっちもさっちも行かぬ）

（次回結末）

へたる（座りこむ）・やげろしく（面倒）  
腰呉れ（無気力）・ひようげる（ふざける）  
しわい（根気がある）・はぶてる（すねる）

